

1 研究主題

「社会を見つめ、問い続ける児童生徒の育成」
～主体的・対話的で深い学びを目指した授業展開の工夫～

2 はじめに

本研究会では、平成30年度から「社会を見つめ、問い続ける児童生徒の育成」という研究主題を設け、授業実践に取り組んできた。昨年度からは、研究主題に迫るための4つの柱、「学び合いの授業形態」、「魅力的な学習課題」、「深い学びに迫るための発問」、「ふりかえりの工夫」を立て、この柱をもとに授業実践し、研究を積み重ねてきた。

しかし、積み重ねてきた授業実践の内容をふりかえり、研究を進めていく中で、今後さらに深く研究主題に迫っていくために研究の方針を検討し見直す必要性を感じ、修正をしながら研究を進めた。具体的には、研究の中で実際に児童生徒にどのような姿が見られたら研究主題に迫ることができているのかということが明確ではなかったため、「目指す子ども像」を設定し、それに迫るための研究仮説を立てた。さらに、その仮説を検証するための3つの手立てに基づいて授業実践と検証を行った。

3 今年度修正した研究方針の内容

《目指す子ども像》

自己と社会との関わり方を考え、主権者として社会のあり方や自分の生き方を考えることができる児童生徒

《研究の仮説》

「社会的事象を身近に感じ、深く思考しながら社会と向き合うことができれば、社会の在り方や自分の生き方を考えることができるようになるだろう。」

《仮説を検証するための具体的な手立て》

手立て① 社会と自分のつながりを意識できる教材を提示する

身近で自分とのつながりを感じることができる教材を用意することで、児童生徒が興味関心や当事者意識、切実感などをもって主体的に社会的事象を追究できる。

手立て② 深い学びに迫るために、発問を工夫する

発問を工夫することによって、多様な社会的な見方や考え方を働かせながら社会的事象の追究を促す。また、その過程で学び合いの学習形態に

よる対話的な活動を取り入れ、多くの資料に触れさせるとともに、他者の多様な考えに触れさせる。このような活動を通して、児童生徒は新たな考えを再構築することができる。

※「深い学び」

習得・活用・探究という学びの過程の中で、社会的な見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精選して自らの考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたりすることに向かう学び。

手立て③ 自分と社会の関係に向き合い、行動化につながるふりかえりの工夫をする

学習内容を整理してふりかえることで学習内容が定着する。そして、それをもとにして自分と社会の関係に向き合い、自分の考えをもったり、行動を見直したり、社会の在り方を考えたりすることができる。

4 研究の過程

- (1) 毎月、小学校部会、中学校部会の各分科会に分かれて、授業実践の報告をしてグループ協議を重ねた。グループ協議では、授業の指導案や授業の力点をまとめた授業実践報告書を持ち寄って研究を進めた。

- (2) 11月 研究授業（篠岡中学校3年生 八木教諭）の実践

【生産と労働】～どのような雇用が自分に合うのか考えよう～

社会科教育研究会に所属する中学校の全教員と小学校の教員の希望者が参加した。

1月 研究授業（米野小学校5年生 保々教諭）

【情報産業と私たちの暮らし】～情報の適切な取り扱い方を考えよう～

社会科教育研究会に所属する小学校と中学校の教員の希望者が参加した。

どちらも研究協議を通して研究授業の分析をし、これまでの研究の成果と課題の共有をした。

5 研究の実際

毎回の研究会の中心となったのが、各分科会に分かれて行った授業実践報告の共有とグループ協議による研究である。年度初めに担当割り振り計画を作成し、毎回の研究会で担当教員が、研究主題に基づいて設定した「目指す子ども像」の実現に迫るための3つの手立てに沿った授業実践を報告し、グループ協議をおこなった。そして、その授業実践報告をもとにさらに新たな授業実践をおこなうことで、研究主題に迫るための研究を積み重ねた。

11月の研究授業では、生徒の疑問やつぶやきを大切にし、そこを出発点にしながら授業を展開する中で、本時のねらいに迫る授業展開がなされていた。

授業では、生徒は自分が将来働くことをイメージしながら、当事者意識をもって追究できていた。また、学習課題である「どのような雇用が自分に合うのか考えよう」について、資料集を中心としたさまざまな資料から、正規雇用と非正規雇用、男性や女性、雇用者と労働者など多様な社会的な見方や考え方を働かせながら深く追究することができていた。授業の最後のふりかえり活動では、授業前と授業後の自分の考えの変容に目を向け、自分の言葉で記述できているふりかえりも見られた。

1月の研究授業では、①つかむ②見通す③確かめる④深めるという段階を設定した単元構成をして授業実践を進め、④深める段階の研究授業を行った。

授業では、熊本地震の際に広まったフェイクニュースや、茨城県でのあおり運転殴打事件に関する不正確な情報の拡散によって辞職した豊田市議の新聞記事などを取り上げた。児童はこれらの身近な話題から社会と自分とのつながりを感じながら、興味を持って社会的事象を追究できていた。また、提示した複数の資料を見て、SNSと新聞記事の信用性や正確性などに着目し、多様な視点から「情報の正しい受け取り方を考えよう」という学習課題について考えを深めていた。授業の最後のふりかえり活動では、対話的な活動の中で触れた他者の考えを踏まえて、自分の考えを整理して再構築する姿が見られた。

6 成果と課題

今年度は、研究の方針を見直しながらも、その都度、研究会として確認して共通認識を持ち、授業実践と研究の蓄積ができたことが大きな収穫である。研究の中心となった授業実践報告では、3つの手立てに沿って各々が挑戦した授業実践を持ち寄ったり、日頃の実践の中で悩んでいることや困っていることなどを意見交流して共有できたりしたことが、研究を進める上でも、教科指導の実践力や指導力を向上させる上でもよい成果をあげていると考えている。

研究授業では上述した通り、研究の方針に沿った一定の成果を上げることができたと考えているが、1単位時間の子どもの変容での検証が中心になっている点が課題である。来年度の愛知県社会科教育研究大会での発表に向けて、研究会での毎回の授業実践報告の中で、これまで通り1単位時間での授業実践から研究を進めるだけでなく、単元構成から検討した授業実践の研究を重ねることも可能な限り進めていきたい。特に今後の研究授業の中では、単元構成からしっかりと授業を組み立て、研究主題に基づいて設定した「目指す子ども像」の実現に迫るための3つの手立てについて、子どもの変容を長い期間で見ながら研究の検証を重ねていくことで、これまで以上により深みのある研究をしていきたいと考えている。